

平成 16 年 8 月 16 日

金谷先生の思い出

金谷先生がお亡くなりになった。残念ながら、お通夜には行けなかったが、金谷先生は私にとって思い出多い先生であった。享年 70 歳ということであるので、私が大学へ入学した時は、45 歳ぐらいであろう。私とさほど変わらない年齢だったことになる。

私の大学時代の専攻は教育心理学であった。教育心理は副免として、国語、数学などの中学校、高等学校の免許を取るように勧められる。ほとんどが比較的単位を取りやすい社会を選んだが、私は比較的英語が好きだった(当時です)ので、英語の副免とすることに決めた。授業が教育心理の時間帯ともぶつかったこともあり、4 年目まで英語の授業があり、苦しんだが、何とか英語の教員免許を取ることができた。また、中学校教員を 8 年やり、中学生に英語を教える機会にも恵まれ、免許を生かすことができたことは、今となってはとても嬉しい。

さて、金谷先生の思い出といえば、英語音声学である。数学棟の 2F の LL 教室。確か火曜日の午後の授業時間であったと思う。音声学の勉強では、英語の発音を徹底的に鍛えられる。t の音、j の音など、カタカナで書くとトでありジュなのであるが、微妙に舌の位置が日本語と違う。そんなあたり、口腔の模式図を見ながら、そして金谷先生の説明を聞いた後に、練習をするわけである。

午後の授業にはやはり眠気がつきもの。ましてや個人練習というと、どうしてもとうとうとするものである。つい大きなあくびをしてしまうと、「ササキクン、大きなあくびですねえ。ねむたいかね。」(二番目のサの音にアクセントがあるところが金谷先生らしいところ。)と後ろの調整室から、私のヘッドフォンに指導が飛び込んでくる。「はい、すみません。」眠気はふっとんでしまう。おそらくこうやって注意されているのは私だけではないだろうと思いながらも周りは一生涯懸命発音練習をしている。

L と R の発音については、学生達に特に厳しかった。「r の音はねえ。」と言いながら、喉を気持ちよさそうに出しながら発音をする姿は今でも覚えている。失礼な話しかもしれないが、金谷先生の物まねといえば、「あくび」、「r の音はねえ。」っていう件である。

一つだけ、とても嬉しい記憶が残っている。夏休みの宿題は、今まで習ったところを全て自分で発音し、カセットテープに録音し、提出するというものであった。私はいつもの金谷先生のように、少しオーバーに発音をして、それを録音した。後期に入ってしばらくしてそのテープが返ってきた。コメントがあり、そこには、「君の L と R の発音は実にすばらしい。GOOD 9」と添えられていた。9 というのは 10 点満点で 9 である。周りが全部英語科の学生の中で何となく小さくなっていつも後ろにいた私であったが、この時ばかりはとても嬉しかった。そもそも金谷先生にあんまりほめられたことがなかったとうのもあったし。この一件で、金谷先生の授業がなんだか前よりも楽しくなった。

3年目くらいだったと思うが、もう一つ金谷先生の授業があった。今ではほとんど何も残っていない（ホントはこれではいけないんだけど）のだが、英語という言語の歴史を学んだような気がする。英語はアルファベット 26 文字。これはドイツ語にもフランス語にも共通し、アジア系の文字以外の多くは、祖先を共にし、確か「サンスクリッド語」と言ったと思う。授業でそのことに興味を持って、随分図書館でその関係の本を借りて読んだ記憶がある。最後のレポートも随分まじめに書いた思い出がある。

卒業してからほとんど会う機会がなかったが、L と R の発音に何となく自信を持てたのは金谷先生のお陰だったと今でも思っている。金谷先生、天国も国際化時代(?)、金谷節でみんなに優しく英語を教えてね。

4953 学校教育専修 佐々木 朗